

住民主体 サロン ホスピスボランティア 在宅看取り

竹原市

住民主体でがんサロンを運営。在宅看取りも推進

みどころ！

◇サロンから在宅看取りまで支援が可能なホスピスボランティアが『竹原市を町ごとホスピスに』のスローガンを掲げ、住民主体で“がんサロン”「つむぎの路」を運営している。病気の進行でサロンに参加できなくなると、出張サロンとして自宅に訪問し、看取りまでの支援を行っている。

◇県内に住民主体のがんサロンは少なく、また、在宅看取りの支援ができるホスピスボランティアの活動は、他の地域には見られない。地域包括ケアシステム構築において、これからのサロン活動に期待される取組のモデルに資するものである。



＜楽しみなサロンの昼食＞

地域概要

総人口 27,679 人 (高齢化率)
65 歳以上人口 10,080 人 (36.4%)
75 歳以上人口 5,243 人 (18.9%)

(平成 27 年 2 月住民基本台帳)

東広島市と三原市に囲まれ瀬戸内沿岸部のほぼ中央に位置し、瀬戸内海の豊かな自然と温暖な気候に恵まれる温暖な地域。平野部と山間部があり、市街地は、JR 竹原駅を中心として扇状に広がる官公庁・商業地区、港を中心とした港湾・工業地区、文化財が集中する寺院等を含む町並み保存地区に大別されている。なお、隣接する大崎上島町に対しても圏域医療機関が対応している。

実施主体

広島・ホスピスケアをすすめる会竹原支部

地域包括支援センターの活動紹介

【体制】

竹原市全体で 1 地域包括支援センターであり、竹原市社会福祉協議会へ委託。スタッフは看護師 1 人、主任介護支援専門員 1 人、社会福祉士 2 人、保健師 1 人、介護支援専門員（ケアプラン作成）2 人、事務 1 人が従事。おおむね中学校区ごとに 4 箇所のランチがあり、各ランチでは住民の身近な相談場所になっている。

【活動】

小地域ネットワーク会議では、地域の課題検討や情報交換を目的として 4, 5 人の民生委員児童委員の活動区域ごとで定期的開催している。同時に、民生児童委員と共に活動する「民生委員発掘ボランティア」やふれあいサロンなどの担い手である「地域ボランティア」が、地域情報を共有する活動を行い、各ランチや地区社会福祉協議会、自治会につながる体制づくりをしている。地域ケア会議は、毎月の定期開催のほか、必要時に随時実施。運営協議会は、年 2 回の開催。広報活動は、市社会福祉協議会と協働した行事案内等を実施している。認知症サポーター養成講座を、市と共同で年 16 回開催。認知症家族の会は、2 か月に 1 回実施している。

取組の背景と課題認識

従来、竹原住民はがん末期状態になると、遠方の緩和ケア病棟や、市内の病院へ入院となり「家で過ごしたい」「安らかな最期を我家で迎えたい」との思いは叶えられなかった。竹原市民のがん体験者等は、がんになっても最期まで竹原の地域で住み続けたいとの思いを持っていた。そのため、自らホスピスボランティアとなり“がんサロン”「つむぎの路」の開設や、在宅看取りを支援する活動を始めた。

一方、『竹原市を町ごとホスピスに』のためには、医療介護等の多職種や行政、市民にホスピス（緩和ケア）の知識や理解を深めてもらうことが必要。そのためホスピスに関する研修会等を毎年開催している。

取組の内容

『竹原市を町ごとホスピスに』

- (1) 住民主体で“がんサロン”を運営。
週1回 10時～15時に開催している。
毎回10～20人の参加者がある。
参加時間は自由である。昼食を作る時は、参加者自身も「できることをしよう」という自主性を大切にしている。
参加者が安心して参加でき、笑顔がたえない楽しいサロンが継続できている。
- (2) 患者と家族がサロンに参加できなくなると出張サロンとして自宅へ訪問する。患者家族の希望に応じて、在宅ケアチームの一員となり看取りまで支援している。
- (3) ホスピスボランティア養成講座を開催する。
- (4) ホスピス（緩和ケア）の啓発事業
医療介護職や行政市民向け講座の開催「小さな町のホスピスモデル」「市民のためのがん講座」
- (5) 市民向けバザー
ボランティア手芸班が品物を作成し販売し、活動資金に充てる。



サロンのベランダで



家まで送るボランティア

ホスピスボランティアの訪問中
「あ～気持ちいい」

皆となら出かけられる！

取組の経緯

- 2003年 — 市民グループ有志5人で「広島・ホスピスケアをすすめる会竹原支部」を発足。在宅ホスピスの実践を開始。
- 2003年 — ホスピスやホスピスボランティア啓発のための「市民のためのがん講座」開催。
- 2007年 — 医療介護等の専門職や市民を対象とした在宅ホスピス緩和ケア啓発事業として「小さな町のホスピスモデル」講演会&シンポジウムを8年連続で開催。ホスピスボランティア養成講座を開催。訪問ボランティアの市民への周知や啓発のため、バザーの開催、クリスマス講座&コンサートを毎年実施。現在に至る。
- 2007～2012年 広島中央地域保健対策協議会「緩和ケア地域連絡協議会」委員。
- 2015～2016年 竹原市在宅死実態調査、「在宅看取り推進ネットワーク構築モデル事業」委員。

取組の成果・今後の課題と展望

◆成果◆

①継続力あるがんサロン「つむぎの路」

2003年より継続し週1回開催。毎回10～20人の参加者がある。参加者は、サロンを楽しみにしており毎日開催の希望が出たり、家族からは「サロンから帰宅すると機嫌がいい」等の声が寄せられている。また、地域包括支援センターをはじめ医療・行政関係者等からサロン参加者や訪問患者の紹介があり、活動が徐々に地域に広がっている。がん患者同士や家族と遺族の参加もあり、ピアカウンセリングの場にもなっている。

②“看取りの文化”地域への広がり

在宅看取りを経験したサロン参加者が、その経過をサロンや地域で語る活動を行うことで、一般市民にとって在宅看取りを知る機会になっている。それによって、在宅看取りを希望する住民が増加しつつある。

③がん患者の在宅看取りの支援に

遺族がホスピスボランティアとしてがん患者の支援を行ったり、病院勤務の看護師がボランティア看護師になり見守りに協力したり、民生委員が見守りに協力するなど、地域に“看取りの文化”が広がりつつある。

◆課題と展望◆

- ①市地域包括支援センターでは、多職種と連携し「在宅死実態調査」に取り組んでおり、在宅死の実態や看取りに関するネットワーク構築が進むものと期待できる。
- ②サロン活動から互助活動への発展は地域包括ケアのひとつである。地域包括支援センター等が看取りを推進する「広島・ホスピスケアをすすめる会竹原支部」の活動を理解しているため、多職種との連携協働が期待できる。

取組のポイント、機能強化ポイント

活動資金の確保として、市社会福祉協議会のボランティア基金助成金申請を活用し、講演会開催時に活用している。サロンを訪れる大学生や大学院生が、がんやボランティアの理解を深めていく姿は頼もしく、在宅ホスピスを経験した患者の家族が、他県に帰ってボランティアに参加している話を聞くと胸が熱くなるなどのこと。また、取材に来たプロのカメラマンがボランティアになり、毎年1回遺影の撮影会を行い、サロン参加者たちの死の準備教育になっているなど、あたたかいエピソードが、年々生まれている。

連絡先

竹原市地域包括支援センター	0846-22-5494	担当：正井かよ子
広島県地域包括ケア推進センター	082-254-1166	
広島県健康福祉局地域包括ケア・高齢者支援課	082-513-3198	